

《公開講演会記録》

青海省で見た

チベット人とチベット問題

前・中国青海民族大学日本語教師 阿部治平



I チベット人地域概況

標高の高さとチベット人の分布

チベット人の分布域は、標高にして2000〜4000mの間、面積では中国国土の5分の1強、縮尺の小さい地図で見れば茶色の人の胃袋のような形をした地域である。ヒマラヤとカラコルムの交わるラダク、ネパール、ブータン、ヒマラヤ南麓の東北インド（NEFA）方面にも分布する。チベット高原で人口が集中するのは大河河谷の小平野と盆地の農耕地帯である。

チベット文化を大まかにチベット仏教

とすれば、チベット人地域のほか、内外モンゴル、シベリアのブリヤート、ドニエプル流域のカルムイクに及ぶ。

4000mの高さに大きな常住集落が多いわけではないが、チャンタン高原のナグチュなどの町もある。この標高では生業はヤクと羊の純遊牧である。3000m以下だと農牧兼業となる。

チベット人といえども高地障害がある。成人には循環器系統の病気「心肺症」があるし、乳児の死亡率は標高が高まるにつれて高くなる。

チベット人地域の3区分

チベット人地域は伝統的に方言の違いによって3つに区分される。方言は互い

に聞き取ることがむずかしいが、文法と文字は同じなので1、2カ月の学習でかなり困難を克服できる。

第1はウイ・ザンで、ラサ、シガツェ中心の旧ダライ・ラマ政府の支配地域、すなわち現在の自治区からチャムド地区を除外した地方である。神の土地と呼ばれる。

第2はカムで、自治区チャムド地区と四川省甘孜州、雲南省デチン州、青海省玉樹州によって構成される。戦士とか泥棒の土地と呼ばれることがある。

第3はアムドで、青海省の玉樹州を除外した全域、甘肅省甘南州、四川省アバ州で構成される。馬の土地という。

現在の行政区域は清朝の民族分割統治



ヤク牛の乳搾り

によるもので、カムとアムドをばらばらにした。中華民国、人民共和国ともにこれを継承している。人口は600万余り。自治区と同じ数の人口が自治区外にある。

生産と生活

人口の大半が生活するのは河谷農業地帯である。ヤルザンブ河谷・盆地やメコン川、長江、黄河の上流河谷には農地があり、ハダカムギ、春コムギ、ジャガイモ、エンドウ、ソラマメ、アブラナなどが栽培される。

農業はたいていヤク、チベット種ヒツ

ジ、ヤギなどの多頭飼育をとまなう（ヨーロッパの混合農業と基本的には同じ）。河谷と山地との間には、家畜を上下させるトランスヒューマンス（移牧）がある。いわば「アルプスの少女ハイジ」の世界である。

ヤクは高地の牛で、3000m以下の土地では飼育が困難なため一般の牛との交配種がある。チャンタン高原には野生種も棲息する。

青海省の純牧畜地帯はメコン、長江、黄河の上流地帯「三河源」にあったが、「生態移民」政策によって強制移住を迫られ、黄河最上流部では人跡は消滅した。また混合農業地帯の牧畜も制限されており、その分生産を縮小せざるを得なくなっている。

農地は、毎年耕すのではなく休耕期を設けることがある。保水と除草（雑草取り）のためである。

衣——和服に似た上着を着る。男は裾を短く女は長く帯を締める。気温が上がると上着を脱いで腰に巻きつける。冬着と夏着があり、冬着は子羊の毛皮を裏にはる。伝統的にはその下に木綿の下着、ズボンを付けたが、現在では背広とズボンが普通となり、伝統的な服は冠婚葬祭に限られるようになった。

食——水

の沸点が低いので、焼いたもの、炒ったもの、あげたものが主となる。パンと麵製品、乳・肉が主である。うどん・パオズなどはやや生煮えのようだ。

住——伝統的には木造。室内は板壁で外は土壁が主である。これはチベット地域に森林があったことの証拠である。ヒマラヤミミ、ビャクシンなどの森林は1950年代から大量に伐られた。人民公社時代を通過して牧民も冬の牧野に定住し、冬は煉瓦の家に住む。

移動に使うテントはカラスが羽を広げたような形をしており、風通しがよい（冬は寒い）。以前はヤクの毛の織布で作った重いもので、運搬の際は、一家4、5人規模でヤク3頭ほどを必要とした。最近では帆布の軽い家型テントが登場した。よく話題になるのは結婚制度だが、一



草原のテント

夫一婦制がほとんどで、一夫多妻、多夫一妻はごく少数。青海ではまず見られない。雲南北部の多夫一妻については、ブログ「リベラル21」(2010・5・26)を参照されたい。地域によって結婚差別がある。

信仰心の強さ

中国、朝鮮半島、日本の仏教は8世紀以前のインド仏教にもとづくが、チベット仏教は8世紀から13世紀のナーランダ僧院などのインド仏教を今日まで受けている。

チベットでは仏教と、それ以前からのボン教と各種の自然崇拜とシャーマニズムが、宗教世界を形づくっている。チベット仏教の見かけの特徴は、宗派の力量を高めるために生まれた転生ラマ制度である。

主流のゲルク派の教主「ダライ・ラマ」の称号は宗教改革者ツォンカパの3代目の弟子ソナム・ギャンツォにモンゴルの王アルタン汗が与えたもので、これが3世ダライ・ラマである。ダライはモンゴル語で「偉大」を意味する。チベット人は「ジャワ・リンポチェ」という。ジャワは仏、リンポチェは至宝。普通の僧侶はアカ。各寺にいる学問上の高位の

僧あるいはその転生者はラマと呼ぶ。転生制度は宗派勢力拡大の手段として表れたもので仏教とは無縁である。

人の名前は宗教がらみが多く、だいたい仏教由来である。

「サンジェー—仏陀」「ゴン チョク—至尊」「メンラー—薬師如来」「ジヨマー—菩薩」「シャムパー—弥勒仏」「ダンジン—観音菩薩」「ドルジェ—金剛」というように。

ターラー菩薩など日本にはない仏がある。歓喜仏はインドのタントラ仏教に由来したものでいわゆる性ヨガをとまなう密教の一部に属する(山口瑞鳳『チベット・下』219頁以下参照)。釈迦の教えにはないものである。

チベット人地域の大きい村落には寺院がある。いづれにも仏塔(チオルテン)と念仏堂(マニカン)がある。マニカンには大きな経車がおいてあって当番でこれを回すところもある。村人は寺院や仏塔を時計回りに回る(コルラ)習慣がある。日常生活は僧侶の占いによることが多い。村々にはハワと呼ばれるシャーマン

がいる。ハワの予言は尊重される。現在の14世ダライ・ラマに対しては、



チベットの服チュバを着ている女性

信仰が薄いと思われる若者でも非常な尊敬の念をもっている。中共中央は民衆のダライ・ラマ崇拜を理解できないらしいが、これがチベット政策の間違いのものになっていると思う。

仏教芸術は青海ではレプコン地方を中心とする。寺院の舞踊と音楽、仏画、仏像などがある。

市場経済の浸透

市場経済の導入以後、生活の向上は衣食住全般に明らかであるが、現金支出の増加が目立つ。とくに教育費、医療費の増加がいちじるしい。社会保障が貧弱だから、支出増加は出稼ぎ、冬虫夏草(フユムシナツクサタケ)の蛾の幼虫にキノコの生えたもの、漢方薬)掘りによっておぎなう。

省都と地方都市、地方都市と農牧村の

格差は大きくなるばかり。とくに医療方面の改善は著しく遅れている。

青藏鉄道や幹線道路の建設によって、地域社会と省政府所在地との政治的経済的結びつきが強くなった。チベット地域も青海省では西寧と結びつき、四川省では成都と結びつく。ラサは精神的中心としては存在するが、さきの3地域区分の経済的意味はなくなった。

最近、寺院や村の金持ちは乗用車を持つようになった。たいていローンで買っている。

学生と教育

青海省には青海大学、青海師範大学、青海民族大学の3大学がある。チベット人とモンゴル人のほとんどは青海省の出身だ。特別優秀なものは中央民族大学（北京）、つぎは西北、西南両民族大学などに行く。第三集団はわが学生群である。北京大学や清華大学へは割当と漢語の関係で入りにくい。

漢回（漢民族の回教徒）学生は北中国各地から来る。奥地の三流大学へ来るくらいだから、統一試験の成績があまり芳しくなかったものだが、漢人学生はチベット人に比べると格段にがんばる。

私が教えた少数民族学生は主にチベッ

ト人だが、意欲が低く成績は悪かった。日本語専攻の漢人とチベット人では、同じ試験で100点満点の平均点が20点も差が開いたことがあった。チベット人だけではない。内モンゴル大学でもモンゴル人学生の成績と学習意欲が低いことがわかっていく。

卒業生たちはその理由をチベット人地域の高校までの教育が良くないからだという。

第1は小学校教育の水準の低さ。授業は9割がたチベット語で行われる。漢語は必修だが、教師の多くは中等師範学校の卒業生で、漢語知識は教科書を教えるのが精一杯。他教科も同様である。児童の質問には怒ったり、ぶん殴ったりする。賃金が低いから教師に人を得られないの



新婚夫婦

だという。子どもは家ではもっぱら農牧業の手伝いをするので学習の時間はない。小学生時代はノートもなく、地面に木や石で字を書いて勉強したというものもある。

第2は中学・高校で漢語による授業が急増することである。チベット語科以外の教科書は漢語である。新入生の漢語は初級レベルにも達していないから、言葉がわからず意欲を喪失するものが出る。2011年に青海省では突如、幼稚園から大学まで教室での使用言語をすべて漢語にする方針が出されたが、抵抗が強くて実施を延期した。

第3は進路すなわち就職。青海では就職は事実上、漢回人優先である。理由は漢語の水準である。東部臨海地方出身の学生は帰郷すれば日系企業がある。「日本語能力試験1級」に合格していれば就職は可能だ。

西北地方には日系企業はない。日本語を活かして仕事ができる職場はわずかな旅行社だけという状態だから、学習意欲は湧かない。

チベット人でよく勉強するものは、同胞にない発想法や常識をもっている。それゆえに彼らはいろいろな意味で中国社会にうまく適応し、チベット人社会の閉

塞状況を突破するかもしれない(以上ブログ「リベラル21」2008・12・15)。

青海の大学では授業に全く出ない

者や、試験の成績が悪い者の中に裏口卒業するのがいる。これに関して学生は、誰某は大学の党指導者にコネがあるとか、教師に親戚がいるとか、賄賂を使ったとかとウワサをしている。「某先生はお金がとても好きです」と教室の教授を笑う学生もいた。

情実入学もあると思う。私の試験でも学力が低く大学教育に耐えられないようなものが入学しているし、成績がよくても入学できなかったものがあるからである。

学校教育の大きな問題は3つあって、大学教育も含めて教師の知識水準が低いこと、やみくもに漢語をもって教育しようとする事、学校を都市に集中するこ



板張りの住居

とである。特に小学校を統廃合し、1年生から寄宿舎教育をやるのは問題だ。自立できない子どもを両親から切り離せば、満足な知識と好ましい習慣を身につけさせることは困難である。かつてオーストラリアでアボリジニーの子どもを隔離教育したのと同じ問題を起すであろう。

II 最近のできごと

チベット人官僚の行動様式

中国の官僚は人々の生活に関心がない。この悪習はチベット地域でもっと程度が悪くなる。大学のチベット人管理職の中にも基礎教育の重要なスローガン「両基」という言葉を説明できない者がいた。「小学校への入学率を上げ、文盲をなくす(漢語で)」ことである。これは同胞の教育への関心がないことを示している。同時に思いつきで仕事を下部のものにやらせ、果実は自分のものにする。日本人教師もこれだいたい義務以外の仕事に追われ苦労したことがある。

私の経験した一例をあげる。

2003年、私の紹介を通して、黄南蔵族自治州尖扎県「ツォカンコ扶貧移民新村」に小学校を建てるため、日本大使

館の「草の根無償基金援助」が1000万円支給されることになった。この人々は長年の早魃のために黄河のほとりに移住したもので、当時は住居も狭く、汚く、学校も医院もなく、生活水は黄河の水を汲むという環境の中で生活していた。

その一方で県幹部は厚い絨毯が敷き詰められた、豪華な3LDKの官舎に住んでいた。これは日本からの無償援助が得られると知ると、私を県幹部の公務員住宅に招待したからわかったことであった。

まだ学校が完成する前、「中国青年報」紙は「03年から1年足らずの間に尖扎県が20数両も乗用車を買った」と伝えた。国家レベルの貧困県尖扎が車のために65万元(すなわち1000万円近く)を支出した!「中国青年報」が記事にしたものだから、省や州など上級機関も調査せざるをえなかったらしいが、結果として不正はないことになった。

漢人化したチベット人官僚は漢人より悪く油断がならない。これは私の強い印象であった。(ブログ「リベラル21」2007・11・25)

チベット地域の民族問題―青海2・21事件、ラサ3・14事件を例として

2008年3月14日13時ころ、中国チ

ベット自治区の区都、ラサで大規模な「破壊行為」が起きた。いわゆる3・14ラサ事件である。

ラサ事件の20日前、2月21日にラサから遠く離れた青海省黄南藏族自治州同仁県、すなわちレプコンでも、チベット系住民と治安当局の衝突事件が起きた。

レプコンにロンウ・ゴンパ（隆務寺）という大僧院があり、数百人の僧侶が行く。ロンウ・ゴンパでは毎年正月の大法会モンラムが旧暦1月13日から行われ、16日には最後の行事の仮面舞踏劇チャムで締めくくられる。日本の初詣と同じように、モンラムには周辺農村から農牧民がロンウ・ゴンパに参拝する。

事件が起きた2月21日（旧暦1月15日）、回族（漢人系ムスリム）に酔払ったチベット人がから



仮面舞踏劇チャム

んだ。警戒中の警官が酔払いを拘束しようとしたので、群衆がわっと集まって、もみ合いや投石となった。

短時間に群衆と警官との衝突が街路にひろがり、暴徒化した連中が日ごろしゃくのタネの回族の商店を襲撃破壊した。なかには「チベット独立」とか「ダライ・ラマの長寿を」と叫ぶ者もいた。警察の車6輛ほどが投石で壊され、解放軍部隊が動員された。最後に鎮圧部隊が群衆を挟みうちにして、僧侶と農牧民あわせて200人くらいを捕まえた。うち牧民2人は重態となり病院に収容された。

翌16日、ふたたび大群衆が県政府の前に集まり口々に逮捕者の釈放を求めた。ロンウ・ゴンパからは高位ラマのチャブングウン・ラマが事態の收拾にのりだして政府関係者と交渉に当たり、捕まえられたもの全員を釈放させた。「僧侶が捕まえられては仮面舞踏劇チャムができない」ということであろう。

これを伝えた朝日新聞の記事だと、レプコン事件はいかにも民族意識に目覚めた集団の抗議行動のようにとれるが事実はそのようではない。ただのケンカがその場でうまく治められず、過剰なりアクションによって騒擾事件になったのである。チベット人学生らは日本人教師らにこ

の事件で同胞が受けた暴行などの惨状を涙ながらに訴えた。日本人教師は日本へこのニュースを送ろうとしたが、私は引き留めた。

チベット人の多くは仏教に彩られた精神生活をし、僧侶は尊重されている。僧侶が呼びかけるとすみやかに行動に参加する傾向は否めない。チベット人の中には、亡命政府と中国政府との対話といった温和な方法に飽きたらぬ者もいるが、たいいていの人はいは我慢しながら日々の平安をねがって暮らしている。にもかかわらず、いったん何かで口火をつければ群衆の我慢がいつせいに破裂する。

3・14ラサ事件はチベット人地域各地に伝えられたが、それは当局に制限されたニュースにうわさが加わったものである。当時日本にいた人のほうが全体をわかっていたのでここでは繰り返さない。

中国では新華社が15日、チベット自治区当局者の発言として「破壊活動はダライ一派が組織的、計画的に策動したことを証明する十分な証拠がある」と伝えた。反政府行動は各地に飛火した。青海省でも各地でデモが起き、当局はデモ参加者を片っ端から逮捕した。ラサ駐屯軍の動員と同時に、当局による寺と学校の封鎖、チベット鉄道の運行停止など、鎮圧体制

も各地で嚴重になった。

国際世論は中国に対して批判的だ。だが中国のネット世論はチベット人を糾弾する。「独立派は殲滅せよ」「鎮圧に手加減するな」といった声が高かった。漢人の世論はこれに尽きる。

西寧の町ではチベット人にモノを売らなかつたり、値を吊り上げたりする店が出た。アメリカの同胞にメールを送ったチベット人はそれだけで捕まり拷問を受けたという噂だった。

この事件の分析で最も説得力のあるものを紹介する（毛沢東主義派の「烏有之郷」ネット、4月21日。但しこのサイトは重慶の薄熙来事件との関連で今年4月から1カ月間閉鎖された）。筆者の呂加平は「ラサ『蔵独』暴乱事件はなぜ未然に防ぐことができなかったか」と問いかけ、政府のやり方が拙劣だったと自答する。以下その要約……

3・14ラサ騒乱事件では、ラサの商店など900戸余が焼け、武警など18人が死に、負傷者数百人、2億8千万元の損害を出した。在外公館は壊され、聖火リレーはロンドン、パリ、サンフランシスコで妨害され、中国の威信は傷ついた。

「国安（国家安全部）情報部門」と「公安国保部門」は国内外できわめて威

嚇力のある「準軍事強制専制組織」である。彼らに「蔵独（チベット独立運動）」「疆独（東トルキスタン独立運動）」の動きがわからなかったとしたら職務怠慢の責めを負うべきだが、じつはこれらの組織は事前に事態を把握していた。

ダライ集団が中国国内に派遣した「蔵独」は140人余。彼らは3月10日にデモをやって過去の逮捕者を釈放するよう要求し、14日にラサと全チベット人地域で独立大暴動を起こすという計画もわかっていた。

情報はただちに「中央」に届けられた。だが「中央」は暴乱をやらせて、国内外に「蔵独」の暴行の実態を明らかにし、事後証拠にもとづいて一網打尽にする計画を立てた。

果たせるかな、14日、「蔵独」僧侶7



2008年暴動

000人余が町に出て焼討ち、打ちこわしに立ち上がった。俗人暴徒1万以上がこれに参加した。

目の前で暴行が行われているにもかかわらず、司令部は軍警部隊に武器携行も現行犯逮捕も発砲も禁止し、盾の携帯を許しただけである。市民は事前に何も知らなかったし、治安部隊も彼らが暴行を受けているのにこれを保護しなかった。

当局は管制地点に隠しカメラを置いて暴乱の状況と暴徒の顔を撮影し、事後一網打尽にした。4月9日までに逮捕したものは953人。

「中央」は予防拘禁をすべきだったのに、「民を餌食とする」政策をとった結果、大混乱となった。これは毛沢東の「人民に服務せよ」という教えと、胡锦涛総書記の「調和ある社会の建設」、「安定は硬い（確固とした）目標である」という指示に違反した判断だ。……以上、要約終り。

呂加平の言うことが正しいとすれば、中国の公安機関はチベット亡命政府や青年組織の内部に強力な情報源を持っていることを示している。

この結果、国内ではテレビ映像などからチベット人を非難する声が高まった。

これは「中央」の狙い通りだった。

だが人命と財産の莫大な損害、チベット地域各地への飛び火など、その代償も大きかったうえに、「中央」の予想に反して国際世論には暴乱の実態は受入れられず、同情はチベット人に集まり、中国に対する巨大な政治外交上の圧力となった。

漢人民衆「老百姓」は一般に、欧米列強の主権侵害と日本による侵略の歴史のため、中国が世界の大国となること、そのため「大一統」と「強兵富国」の目標をほとんど無意識のうちに分け持っている。そしてそれが今、実現しつつあるわけである。

この状態が続くかぎり全人口の92%を占める漢人は、中共を支持する。台湾統一も「大一統」の論理の延長上にある。

一方、漢人「老百姓」にはウイグルやカザフなどチュルク系民族やモンゴル民族やチベット民族が独自の文化と歴史を持った、漢民族とは別な民族だといった認識は希薄である。学術報告集にさえ、チベットは古代以来ずっと中国の領土だった、古代吐蕃王国も中国の地方政府の1つだった、つまり元朝以来中華民族の大家庭の中に入ったという公式見解はまちがいでチベット民族は遠い昔から「中華民族」の一員

だったといった没歴史的記述がある。

さらにチベットをめぐる中国は3回戦争をしているから、現代チベットは中国が血であがなった土地だと考える人もいる。

第1回は1951年のチャムド(昌都)作戦である。第2回は1959年からはじまり62年までつづいた反乱の鎮圧である。第3回は1962年10月の中印国境紛争である。

だから中国政府は、寸土といえども領土を失うことはできない。チベット高原がたとえ無人の荒野となろうとも独立など認めない。「老百姓」の内モンゴルやチベットや新疆への大量移住も正しい行為である。移民を嫌がるほうがどうかしていると考える。

このため少数民族による自民族現代史の研究などは独立運動を疑われやすく、事実上できない。

漢人「老百姓」の少数民族に対する差別感、日常は表面に出ない。本心では少数民族は「教養」の程度が低く、汚く、「迷信深い」と思っている。「教養」とは漢語の水準である。迷信とは漢人には宗教と迷信の区別ができないからである。漢人インテリにさえ、モンゴル人やチベット人には統治能力がないという人がいて

驚いたことがある。

この論理で、カムとアムドをふくめたチベット人居住域全体を網羅した自治区、高度自治といった要求はいまや犯罪に近いものとなった。(ブログ「リベラル21」2008・3・21)

私はチベット問題はチベット人代表と中国政府が解決すべき問題と考えるので、自分の意見はいわない。

ここでは老チベット人コミュニスト、91歳になるポンツォク・ワンギェルの民族論を紹介したい。彼は1940年代のチベット共産党の創設者であり、ダライ・ラマと分離独立を画策したとして、1960年以来、秦城監獄に18年間投獄されていた。鄧小平が政権を掌握した後、全国人民代表大会常務委員、中央民族委員会副主任という大臣レベルにまで上った。1980年代初めの憲法改定時に、レーニンやスターリンの民族理論を駆使して漢人の民族問題専門家と激しくやりあった人物である。(拙著『もう一つのチベット現代史』明石書店)

ポンツォク・ワンギェルは、以下のように言う。……

中共統一戦線部は文化大革命的方法を変えてダライ・ラマと交渉に入るべきだ。民族分離主義は民族圧迫政策の産物で

ある。異なった民族が連合し団結するのは平等政策の結果だ。多民族国家でも民族の平等があるなら、少数民族の激しい不満や、ひいては分離独立の主張などは起きない。

中国憲法は少数民族の高度自治を認めている。ダライ・ラマも独立ではなく自治を要求している。ここに交渉の余地がある。

ダライ・ラマが生きているうちに問題を解決しないと、民族問題はいまより深刻になる。逝去したときにチベットを代表できる人物はいなくなる。ダライ・ラマの死を中国側は期待しているかもしれないが、そうなれば問題は複雑化し、国際的になり、解決が難しくなる（チベット人過激派を抑えられないという含意がある）。新ダライ・ラマが生まれたところでさまざま権威が生まれるわけではない。中国にとっても現地チベット人にとっても不幸な状態が半永久的に続く。中共統一戦線部は文化大革命的方法を変えて、ダライ・ラマと交渉に入るべきだ。（ブログ「リベラル21」（2008・3・18）

最近のチベット

青海省では3月14日にも、黄南藏族自

治州同仁県などでチベット族僧侶らのデモ発生が伝えられており、黄南州ゼコでは中高生の座込みがあった。四川省アバ・チベット族チャン族自治州アバ県で16日、僧侶が焼身自殺を図った。米政府系放送局「ラジオ自由アジア」（電子版）によると、中国青海省海南藏族自治州同徳県で16日、当局に対する住民らの抗議デモがあり、50人以上が拘束されたと報じた。参加者は1000人余りで「チベット独立」などと叫んだとの情報もある。同仁県でも17日、地元の男性が焼身自殺で死亡した。外電は、3月17日までに抗議の焼身自殺を図ったチベット族は2009年以降で計30人になったとしている。

3月中は民族自治州の民族小中学校は閉鎖され、外国人立ち入り禁止措置が取られた。

なぜ自殺が南から北にチベット人地域全体に拡大したか。中国当局はダライ一派がやらせているというが、仏教では自殺を戒めているので、私はこの見解はとらない。亡命政府や外国メディアの多数説はシャカ前世の「捨身飼虎」の精神でチベット人地域の苦難を世界に訴えようとした、というものである。これも僧侶にはあるかもしれないがすべてではない。一般的にはチベットやモンゴルなどの

仏教系青年が著しい閉塞状況に置かれていることと関連があると思う。行政とくに公安関係者のチベット人たちに対する暴力的態度、高卒大卒の進学と就職の絶望的状态、学校における漢語の強制、監視カメラ・マイクなどによる寺院、学校での日常的監視状態、小学校の統廃合と1年生からの寄宿舎教育といった中で、若者は自民族の将来に絶望を感じ、生きる希望を失っている。自殺が僧俗を問わずチベット人地域に広がったのはこのためである。

（4月6日・講演会）

講師略歴（あへ はるひら）

1930年 長野県生まれ

東京教育大学農学部卒業

高校教諭、中国天津外国語大学、大阪

外国語大学の教員を経て、

中国青海民族大学日本語教師

主要著書

『中国の自然地理』（東京大学出版会）

『黄土高原生活誌』（青木書店）

『もう一つのチベット現代史』（明石書店）